

戦前の日本におけるユダヤ教

はじめに —CISMOR 研究会による研究プロジェクト 「日本におけるユダヤ人とユダヤ教」—

アダ・タガー＝コヘン

2014年1月26日、「日本におけるユダヤ人とユダヤ教」をテーマとする第1回ワークショップが同志社大学において開催された。約5年前に私が始め、その後他の研究者にも徐々に参加していただくこととなった企画が実現し始めたのである。企画のもともとの動機は、宮澤正典先生がその学者としての生涯を捧げられ、現在も名誉教授としてお続けになっている研究を継続することであった。宮澤先生の研究の焦点は「日本とユダヤ人」であり、日本でのあらゆる関連出版物の目録作成もその中に含まれている。宮澤先生による2冊の総合的文献目録は、「日本とユダヤ人」についてのあらゆる研究の礎である¹。

研究プロジェクト「日本におけるユダヤ人とユダヤ教」の目的は、近代日本史におけるユダヤ人の現実と、日本政府の動き、新聞報道、学界における研究活動等に反映される日本人のユダヤ人に対するさまざまな態度を研究することである。本プロジェクトの中心的メンバーであり第1回ワークショップで論文発表をした研究者は、宮澤正典（同志社女子大）、高尾千津子（立教大）、市川裕（東京大）、佐藤泉（東洋学園大）、勝又悦子（同志社大）、ドロン・B・コヘン（同志社大）（敬称略）、私自身である。他の研究者も第1回、また2014年9月21日に開催された第2回ワークショップ「19-20世紀の世界におけるユダヤ人の移動—日本・極東との関係」に参加している²。

歴史的に日本人にとって、「ユダヤ人」は近代になって初めて遭遇した現象である。その最初の「出会い」もユダヤ人との直接的な接触ではなく、書物や風聞を通して間接的に出会ったのである。ベン・アミー・シロニー教授の著書『ユダヤ人と日本人』（*The Jews and the Japanese*）に詳細に記され、グッドマン・宮澤の『*Jews in the Japanese Mind*

（『日本人の意識におけるユダヤ人』）にもあるように³、日本人が生身のユダヤ人と出会ったのは明治時代に入ってからである。明治維新後に来日したユダヤ人はいたものの、大きな在日外国人コミュニティの内部では

少数派であり、特にユダヤ人は「ユダヤ人」としてではなく、それぞれの国籍で身分表明していたこともある。日本人がユダヤ人として識別することはできなかった。ユダヤ人は、ひとつの共同体として移動したのではなく、日本の近代化を援助するためや事業目的で個別に来日、定住した。それでもこの時期に小さなユダヤ人共同体が横浜と長崎、さらには神戸に生まれ、神戸にはその後シナゴーグが建ち、ユダヤ人埋葬地も確保された。バルフォア宣言等の20世紀初頭の歴史的展開により、日本はユダヤ問題への認識を高めはするが、政治的理由から日本にとては関連性の低い問題であり続ける。石田訓夫博士の研究は、この時期のパレスチナ地方に対する日本政府の態度を明確に示している⁴。

ユダヤ人やユダヤ教に関する研究は日本の学界においては人気のある分野ではなく、学部・院レベルの教育課程を設定している同志社大学を除いては、ユダヤ学の課程を提供している大学は日本はない⁵。本 CISMOR プロジェクトの中心的メンバーのひとりである熊本大学の竹内裕准教授は、最近ヘブライ大学で発表した論文の中で、日本におけるユダヤ研究の発展を要約し、ユダヤ研究学会の数、研究プロジェクト、ユダヤ研究論文を出版している学術誌等を明示された。ユダヤ学は、これまでに重要な展開はあったが、日本ではいまだに「秘教的なもの」なのである⁶。

日本におけるユダヤ人について出版される研究は、日本人が多数のユダヤ人（ナチ政権やヨーロッパの戦禍から逃れてきたユダヤ難民）と実際に接触した第二次世界大戦時期を主に扱う傾向がある。JISMOR の本号に掲載されている論文は、日本人がユダヤ難民を受け入れるに至った政治的理由を検討しつつ、ユダヤ人は一体どういう民族なのかということを当時の日本人は理解できていたのであろうか、と問いかけている。外国から日本に入ってきた反ユダヤ主義が、日本人によるユダヤ人イメージ認識に否定的な影響を与えた⁷。

現実にユダヤ人が身の回りに存在しないのに日本に生まれた反ユダヤ主義については、多くの出版物が取り上げており、特に『シオン賢者の議定書』の類の日本語の出版物が増加した1980年代末期から1990年代初期にかけて活発であった。このテーマに関しては、約20年後の見地から振り返って検討するために、独立したワークショップをいずれ開催することを望んでいる。日本の反ユダヤ主義出版物の認識は、当然ながらヨーロッパやその他の「伝統的な」反ユダヤ主義とは異なると思われるが、それでもなぜ日本で反ユダヤ主義的出版物がもてはやされたのか、という疑問が残る⁸。前述したユダヤ人と日本に関する英語の出版物のタイトルは、*Jews in the Japanese Mind*（日本人の意識におけるユダヤ人）と *Japanese Attitudes Toward Jews*（日本人のユダヤ人に対する態度）である。強調されているのが「意識」や「態度」といった「考え方」であり、実際の「活動」や

「関係」でない点は興味深い。

研究プロジェクト「日本におけるユダヤ人とユダヤ教」は二つの方向性をもつ。一つは、歴史・文化的ならびに人類学的視点より日本におけるユダヤ人の存在と、その東アジアの他のユダヤ人共同体との関係をたどる。研究では日本における最初のユダヤ人共同体と、それらの中国大陸、特にハルビンと上海のユダヤ人共同体との関係を扱う。

二つ目の方向性においては、近代日本、特にこの数十年間における宗教・文化的現象としてのユダヤ人とユダヤ教への学術的関心を検討する。これまでに日本の研究者が扱ってきた研究テーマに関して、出版された論文の量や質、その傾向等を含めいくつか疑問が上がっている。さらに、社会一般にも目を向け、ユダヤ人に関するメディアや文学出版、ユダヤ人とユダヤ教に関する学校教育等も検討する。

日本におけるユダヤ人を研究する場合に避けて通れない問題として、しばしば「ユダヤ人の国家」と言及されるイスラエル国家の問題がある。確かに、イスラエルには現在世界中のユダヤ人の半分が暮らしている。尤も、住民の約 20 パーセントはイスラームか（アラブ）キリスト教徒の非ユダヤ人ではあるが。日本の政治指導者のイスラエルに対する態度は、日本政府の政治的利害関係を反映して大体が控えめである。私たちの研究では、日本・イスラエル間の文化的、学術的関係については追究するが、両国の政治活動や政治的立場を評価することはない。

さらに、研究グループのメンバーには日本在住のイスラエル人が 2 名いるので、日本とイスラエルの文化交流や関係に関する研究の方向性が提案されるかもしれない。イスラエル文化の日本文化への影響についても検討する予定である。例えば、イスラエルへの日本人旅行者や留学生は何人いるのか、イスラエル滞在後日本に帰国するのか、イスラエルを研究対象とする学者は何名いるのか等。

1 月 26 日のワークショップで発表された論文は、歴史的視点と民族誌学的かつ学術的研究の両方の方向性をカバーしており、また日本におけるユダヤ教・文化に関する出版物についても検討された。最後には、日本におけるイスラエル・ユダヤ人の印象も紹介された。発表された論文のタイトルは以下の通りで、このうち 2 編が JISMOR の本号に掲載されている⁹。

- ・ 宮澤 正典「昭和戦時下における新聞の親ナチ・反ユダヤへの傾斜—それに同調できなかった人々」
- ・ 高尾 千津子「日本統治下ハルビンのユダヤ人社会 1930—40 年代」
- ・ 佐藤 泉「在日ユダヤ人コミュニティの歴史—長崎、神戸、横浜、軽井沢、東京—」
- ・ 市川 裕「日本人にとってのタルムード翻訳の意義」

- ・ 勝又 悅子「最近のユダヤ関係の出版事情」
- ・ ドロン・B・コヘン「*Being Israeli in Japan*（日本においてイスラエル人であること）」

宮澤先生の論文は、ナチの台頭から第二次世界大戦終末までの期間に、『朝日新聞』や『毎日新聞』といった日本の主要新聞がユダヤ人に対してとった態度を概観している。ナチのユダヤ人に対する人種差別的扱いを、日本人は当初は受け入れることも理解することもできなかったが、そのうちナチのプロパガンダの影響を受け、さらに日独の同盟関係を考慮して、ヒットラーの演説をそのまま引用するなどユダヤ人について極めて否定的で悪意のある見解を述べるのが普通になっていた。宮澤先生は、戦争末期には日本の「新聞がもはや事実を伝えるのではない、事実を曲解した強弁をもって説論を垂れるための媒体と」なり、「そこに展開された言論（社説）もまた極めて独断的な虚言そのものとなってしまっていた」と述べられる。

日本にユダヤ難民が殺到したことで、日本人の一部がユダヤ人と初めて出会うことになった。日本人にとってユダヤ難民は見慣れない外国人であったが、それでも親切に接した。しかし、日本の新聞はそのような報道はしなかった。宮澤先生の論文に引用された新聞記事は、日本人による「ユダヤ人問題」の扱い方の違い（大部分が否定的で、肯定的なものも少しあった）を鮮明に伝えている。

高尾先生の論文は、第二次世界大戦前後の日本統治下の満州国のハルビンにおけるユダヤ人が主題である。この論文では、いかにユダヤ人がロシア共産主義者とその反対者のあいだで引き裂かれていたか、日本当局がユダヤ人保護において無力であったばかりでなく、殺害されたユダヤ人の葬儀でユダヤ人指導者の一人が「国家権力は平和を確立する義務がある」と演説したことで、ユダヤ人を非難したことをあざやかに伝えている。エルサレムの中央シオニスト文書館所蔵の資料検討と当時のハルビンのユダヤ人共同体の中心的人物、アブラハム・カウフマン氏への取材をもとに、高尾先生は開戦直後の破壊的な数年間におけるハルビンで日本人が果たした役割を明示している。

参考文献

- 1) *The Jewish Community of Japan 50th Anniversary Yearbook* (Nama Productions, Jewish Community of Japan, 2004).
- 2) Ben Ami Shillony, *Japanese Views on Jews and Judaism* (ed. Shazar Library, The Herman Institute of Contemporary Jewry, workshop of the Study Circle on World Jewry in the Home of the President of Israel; 1993) [ヘブライ語]
- 3) Pamela Rotner Sakamoto, *Japanese Diplomats and Jewish Refugees: A World War II*

Dilemma (London: Praeger, 1998).

- 4) Marvin Tokayer and Ellen Rodman, *Pepper, Silk & Ivory: Amazing Stories about Jews and the Far East* (Jerusalem-New York: Gefen publishing house, 2014).
- 5) Marvin Tokayer and Mary Swartz, *The Fugu Plan: The Untold Story of the Japanese and the Jews During World War II* (Jerusalem: Gefen Publishing House, 1979 edition of 2004).

注

- ¹ 宮澤正典『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1877～1988』新泉社、1990年；宮澤正典『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1988～2004』昭和堂、2005年。
- ² <http://www.cismor.jp/en/2014/09/22/immigrant-acculturation-and-transnationalism-israelis-in-the-united-states-and-europe-compared/>を参照のこと（2014年12月10日現在）。
- ³ 日本語版は、ベン・アミー・シロニー『ユダヤ人と日本人—異端視され、迫害されながら成功した両民族』日本公法、1993年。シェイラ・K・ジョンソン (Sheila K. Johnson) による書評 “Book Review of Ben-Ami Shillony, *The Jews and the Japanese: The Successful Outsiders* (Tuttle, Rutland&Tokyo, 1992)” in: *Monumenta Nipponica* 48:1 (1993), 136-139 を参照のこと。<http://www.jstor.org/stable/2385479?seq=2> (2014年12月12日現在)。David G. Goodman and Masanori Miyazawa, *Jews in the Japanese Mind: The History and Uses of a Cultural Stereotype* (New York: Free Press, 1995).
- ⁴ 石田訓夫の重要な論文として、Kunio Ishida, “The Origins of Japan’s Postwar Policy in the Middle East: The case of Establishing Diplomatic Relations with Israel, 1952-1956,” (エルサレム・ヘブライ大学博士論文、2009年) がある。パレスチナ委任統治領に関する石田と白石仁章との最近の共著「第二次世界大戦前夜における極東地域のユダヤ人と日本外交」『外交史料館報』第26号、外務省外交史料館、2012年も参照のこと。
- ⁵ 同志社大学におけるユダヤ学課程については、<http://acohen.freya.weblife.me/mhw/pg307.html> を参照のこと（日英併記。2014年1月1日現在）。
- ⁶ 竹内裕の論文“*The Rise of Interest in Jewish Studies in Japanese Academia* (日本の学界におけるユダヤ学への関心の高まり)”を参照のこと（以下で閲覧可能）。http://sfile.f-static.com/image/users/215554/ftp/my_files/Special%20Issue/NewFiles/tekeuchi%20fulltext.pdf?id=15913170 (2014年12月15日現在)。さらに、平岡光太郎「日本におけるユダヤ学の現状—学術団体の趣意書等の考案」『一神教世界 2』(CISMOR, 2009) も参照のこと。
- ⁷ ひとつの問題提議として、Rotem Kowner “On Ignorance, Respect and Suspicion: Current Japanese Attitudes toward Jews,” *The Vidal Sassoon International Center for the Study of Antisemitism The Hebrew University of Jerusalem: Analysis of Current Trends in Antisemitism*, (1997 acta no. 11) <http://sicsa.huji.ac.il/11kowner.htm> (2014年12月10日現在) を参照のこと。

-
- ⁸ 全米ユダヤ委員会環太平洋研究所（The Pacific Rim Institute of the American Jewish Committee）は 1992 年にこのテーマで論文を発表した。同論文の再読と解釈が求められる。Jennifer Golub, *Japanese Attitudes Toward Jews*, http://www.ajcarchives.org/AJC_DAT_A/Files/889.pdf にて閲覧可能（2014 年 12 月 10 日現在）。
- ⁹ ワークショップに関しては、<http://www.cismor.jp/en/2014/01/26/jews-and-judaism-in-japan/> と <http://www.cismor.jp/en/2014/09/22/immigrant-acculturation-and-transnationalism-israelis-in-the-united-states-and-europe-compared/> を参照のこと（2014 年 12 月 10 日現在）。